

里帰り分娩を行った褥婦の育児生活での思い

The thought by the childcare life of the primipara puerperal in homecoming delivery

石田 都乃

ISHIDA Satono

I. 緒言

近年は少子化、核家族化、家族機能の低下などの社会構造の変化に伴い、育児環境の孤立と育児能力の低下が問題となり、育児ストレスを抱える母親の増加がみられる。そのため、褥婦は分娩施設退院後の生活の場として実家を選んでいる割合がほとんどであり、森田¹⁾は「産前産後の里帰りは9割の女性が行っていた。」と報告している。

産後1カ月間は産褥期にあたり、身体的、社会心理的にも大きな変化を迎える時期である。また新しい家族を迎えたことによる家族関係の変化やそれまでの生活状況との違いを経験する時期でもある。

褥婦にとって、入院中は専門職者が身近にいて相談にのったり援助したりできるが、退院後は自ら判断し様々な新しい事態に対処しなくてはならないため、褥婦の多くは不安に陥ることが多い。

しかし、里帰り分娩の場合、出産施設の変更・市町村を越えた生活の場の変更により、行政からの新生児家庭訪問指導を受けることができない。そのために、産後1カ月間は専門職からの支援を受けられないことになる。これまでの産後1カ月の褥婦に関する報告では島田らの心配や不安、希望するサービスの報告^{2) 3)} やソーシャルサポートに関するニーズ⁴⁾、褥婦の受けたと認識しているサポートと希望するサポートに関する報告⁵⁾ はみられるが、里帰り分娩を行った褥婦の育児生活に着目し質的な研究は見られなかった。

今回、里帰り分娩の初産婦褥婦の産後1ヶ月までの育児生活での思いを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

妊娠後期に居住地以外の他市から本人の実家に帰省した初産婦で、Aクリニックにて正期産内に出産し、新生児に小児科医の継続的なフォローの必要がなく、母子の1ヶ月健康診査に来院した母親6名。

2. データ収集方法

クリニックの助産師より紹介された褥婦に研究目的・具体的な方法を説明し同意を得、インタビューガイドをもとに半構成的な面接を行った。データ収集期間は2006年1月から6月に実施した。

3. データ分析方法と妥当性

面接内容を逐語録に起こし、逐語録からケースごとに家族への思いに関して類似した内容に分類

しコード化した。次にそのコードを相違点、共通点について比較しながら分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。データおよび分析の信頼性と妥当性を確保するために、研究全般に対して適宜研究指導者より定期的にスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

本研究は、聖隷クリストファー大学の倫理委員会（受付番号 05-012、2005 年 12 月 14 日承認）の審査を受け倫理に関する承認を得た。対象の選定は対象の条件を満たす褥婦をクリニックの助産師が行い、褥婦に対して研究者が研究の説明をすることの了解を得た。その褥婦に対して本研究の目的、研究への参加は自由意志であること、いつでも断れること、また断ったこと、辞退しても不利益を被ることがないこと、個人の秘密は厳守しデータは研究以外では使用しないこと、個人が特定されることのないよう提示することを文書および口頭にて説明し同意を得た。また、母子健康手帳を閲覧することを説明し承諾を得た。面接は同意を得られた母親を対象としテープに録音し、同時に記録も行った。

研究対象者が面接を行っている間、一緒に来た乳児を 1 人きりにしない、乳児が泣くことで面接中の対象者に心配をかけないように同クリニック内の看護職員の協力を得た。また授乳時間と重なるようであれば、先に授乳をしていただき落ち着いた中で面接を行うよう配慮した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要

対象者の出産時の平均年齢は 27.8 歳（21～35 歳）の初産婦である。6 例中 5 例が正常分娩、予定帝王切開が 1 名であった。出産時の平均妊娠週数は 38.5 週（37 週～40 週）であった。里帰り先である実家では実父母または実父母と祖母と生活していた。県外からの里帰り分娩は 2 例（B・E）、県内では居住地ではない他市からの里帰り分娩は 4 例（A・C・D・F）であった。また、産後の里帰り期間は産院退院後～3 か月で 1.5 か月が最も多かった。

表 1 対象者の背景

	対象者の年齢	夫の年齢	妊娠週数	分娩様式	自宅での家族構成	実家での家族構成	居住地
A	27	30	38週	正常分娩	義父母と同居	実父母	県内
B	27	27	40週	正常分娩	核家族	実父母と祖母	県外
C	30	31	37週	帝王切開	核家族(同敷地内に義父母別棟)	実父母	県内
D	27	32	39週	正常分娩	義父母と同居	実父母	県内
E	35	35	38週	正常分娩	義父母と同居	実父母	県外
F	21	23	39週	正常分娩	義父母と同居	実父母	県内

2. 里帰り分娩の理由

里帰り分娩の理由は「産後の家事支援、育児支援の期待」または「初めての育児に対するサポート」であった。里帰り分娩の決定はすべての対象者が夫と相談し、その後、実父母と相談して決定していた。

3. 産後1カ月間における初産婦褥婦の思い

分析結果より5つのカテゴリーと13つのサブカテゴリーが抽出され、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》文中斜体文字は初産婦褥婦が語った内容であり、ケースはアルファベットで示している。

産後1カ月間の育児生活での思いとして【里帰り分娩も一長一短】【夫の育児参加は大丈夫】【友人はかけがえのない存在】【分娩施設の存在は大きい】【「母親なんだ」と思う】の5つのカテゴリーが抽出された。

1) 【里帰り分娩も一長一短】

《里帰りしてよかった》《家族みんながみてる》《母が干渉してくる》の3つのサブカテゴリーで構成された。実家からの支援を目的に里帰り分娩を試みて適切な支援が得られた事、一方で実母が育児に口出しをしたりすることで干渉してくるという思いを抱いたことから事から生成した。

(1) 《里帰りしてよかった》

里帰り分娩したことで実父母から適切な支援が得られたことで里帰りしてよかったという思いを抱いていた。

「*「やっぱり里帰りして良かった」と思いますね。不安の中でも頼れるから*」(A)

「*「やっぱり不安なんで……。でも実家にいたから、お母さんが手伝ってくれたから*」(E)

「*「お母さんがいるからいろいろ聞けて1人だったらいろいろ考えちゃっていたかもなんだけど、結構あっけらかんとやってこれたから里帰りして良かった*」(B)

「*「実家にいて、お母さんもいたし、お父さんもいたしフォローしてくれて、甘えられた*」(F)

(2) 《家族みんながみてる》

里帰りしたことで祖母も育児支援を手伝ってくれたことで家族みんなが手伝ってくれるという思いを抱いていた。

「*「お父さんも何かあると気になるみたいで見に行ってくれますね*」(F)

「*「お父さんもお母さんもおばあちゃんも子どもが泣いていても笑っている。全部が可愛いみたいでいつも笑ってみてくれる*」(B)

(3) 《母が干渉してくる》

実母が育児に口を出してきたり、勝手に新生児のものを購入したりしたことで母が干渉してくるという思いを抱いていた。

「*「お母さんが「そんなに神経質にならなくていい」とかって、いちいち私のやることに対して言ってくる*」(E)

「*「母親が子供のことで口出ししてくるんですよね*」(C)

2) 【夫の育児参加は大丈夫】

《育児に協力してくれる》《育児をがんばってくれそう》の2つのサブカテゴリーで構成された。妻の実家を来訪した際に育児に協力してくれたり、その様子から自宅に戻ってからも育児を頑張ってくれそうという思いを抱いた事から生成した。

(1) 《育児に協力してくれる》

妻の実家に来訪した際、育児参加してくれたことで育児に協力してくれるという思いを抱いていた。

「旦那も「かわいい、かわいい」と言って世話をしてくれる」(A)

「おむつ換えとか手伝ってくれたり、抱っこしてくれたり、あやしてくれたりとかしてくれますね」(B)

「一緒に世話をしていると助けてもらっているなという感じがある」(C)

(2) 《育児をがんばってくれそう》

育児に参加している様子から自宅に戻ってからも育児に率先して参加しがんばってくれるのではないかという思いを抱いた事から生成した。

「週末来てくれて、ちゃんと手伝ってくれるんでその辺は大丈夫かなと思っています」(A)

「旦那が子どものいる友達とかにいろいろ聞いてくれて、「こうした方がいいよとか、それは大丈夫みたいだよ」とか言ってくれて、育児参加してくれるのでこれからも大丈夫かなと思います」(C)

「結構、触りたくてしょうがないみたいで、やってくれますね。これからもやってくれる人だと思います」(B)

3) 【友人はかけがえのない存在】

《友人のアドバイスは心強い》《旧友との再会を喜ぶ》の2つのサブカテゴリーで構成された。初産婦褥婦は、自身の友人は同じぐらいの子どもがいることで育児の適確なアドバイスを得ることができた事や、友人と会話したことで自分と同じことを考え、体験している人がいて1人ではないということを確認し、安心と連帯感を感じたことで貴重な存在という思いを抱いたことから生成した。

(1) 《友人のアドバイスは心強い》

育児の最新事情を知っている友人から適確なアドバイスを得ることができた事や、友人と会話し思いを共有することで自分と同じことを考え、体験している人がいるという事を確認し、安心と連帯感を感じたことから心強いという思いを抱いていたことから生成した。

「適確なアドバイスでもあったし、同じなんだな。話を聞いて、みんな同じ所で悩むんだなと思いました」(C)

「2人子どもがいる友達に相談して、アドバイスはしてくれてありがたかった」(B)

「友人とは出産時期が近いから最近の育児事情を知っていて「わたしの時はこうだったわよ」ということで教えてくれて安心する」(D)

(2) 《旧友との再会を喜ぶ》

里帰り分娩が旧友と再会するきっかけとなり、再会や共通の話題ができて喜びを感じていた事から生成した。

「長く帰れる機会がもうないから、友人にもゆっくり会っておしゃべりする機会ができた事がよかった」(B)

「今、妊婦の友達がたくさんいて、そういう子たちと会ったりしていて共通の話題ができて楽しかった」(D)

4) 【分娩施設の存在は大きい】

《頼る所は分娩施設だけ》《退院後の継続支援に感謝》《ちょっとした一言で前向きに考えられた》の3つのサブカテゴリーで構成された。分娩施設からのサポートやちょっとした一言で安心を得たり前向きに考えられたことや里帰りしたことで周囲の事情が分からず分娩施設しか頼る所がないという思いを抱いた事から生成した。

(1) 《頼る所は分娩施設だけ》

里帰りしたことで普段生活していない地域で、初めての育児のためどこに相談していいのかわからず、分娩施設しか頼る所はないという思いを抱いていた事から生成した。

「こしかないですね。頼る所は・・・」(E)

「親も(中略)本当は心配していると思う。だから病院に連絡した方が親も納得するし、こしか知らないから)」(A)

(2) 《退院後の継続支援に感謝》

実父母、夫、分娩施設の専門職からのサポートを受け安心を得、よかったと思った事から生成した。

「なかなか飲んでくれなくて、ここの母乳外来に来たんですよ。ここで看護婦さんに教えてもらいながらあげたら、すごいごくごく飲んでくれた。ここ(母乳外来)に来て正解でした」(B)

「泣かれたりとかして泣きやまないとどうしていいのかわからないので。その時、ここに(病院に)電話しましたね。ありがたいですね」(C)

「便秘の次の日にウンチがゆるかったから(病院に)電話したら、すぐに教えてくれましたね。「大丈夫ですよ」って言われてホッとした」(D)

(3) 《ちょっとした一言で前向きに考えられた》

分娩施設の専門職のちょっとした一言で前向きに考えられた事から生成した。

「母乳外来で「大丈夫だよ。」「上手にできているよ。」とか言ってくれて自信がついた」(B)

「電話で「いつでもいいよ」と言ってくれたので気が楽になった」(C)

「もし心配なようなら母乳外来をやっているから来て」という看護師さんが言ってくれたので来る気になった」(D)

5) 【「母親なんだ」と思う】

《新生児の心配事は解消し安心した》《自分なりの方法を見つけた》《母親としての優越感》の3つのサブカテゴリーで構成された。

(1) 《新生児の心配事は解消し安心した》

退院後の生活の中で新生児に対しての心配事は実母、夫、友人、専門職の支援を受けて解消し安心を覚えたことから生成した。

「ウンチが全然ここに入院していた時と違うウンチだったんで、これは大丈夫かな?と思ったけどそういうウンチは大丈夫ですと電話した時に言われて安心した」(A)

「ここに来て看護婦さんに見てもらいながらあげた時にすごいごくごく飲んでいたのでおんなじような体制で挙げたら凄い飲んでくれるようになって安心しました」(B)

「オムツかぶれがひどくて泣ききっちゃったことがあるんですけど、だだれちゃって、大丈夫かなと思ったけど、ここにかかって薬を頂いて様子を見て良くなったので良かったです」(C)

「お母さんに教わったのノ字マッサージとかすると、次の日たくさん出してくれるから大丈夫と思って」(D)

(2) 《自分なりの方法を見つけた》

日々の育児生活の中で試行錯誤しながら、自分なりの新しい方法を見つけたという思いを抱いた事から生成した。

「夜中とかいらいらしちゃって接しちゃったんですよね。そしたら全然寝てくれなくて(中略)、心入れ替えて穏やかな気持ちで接したらいい子になったんですよ」(B)

「自分でやっていくうちに、たいていぐずっているのは、余裕もって接することができるようになったんですよ」(F)

「このやり方で本当にいいのかな?」と最初は思ったけど(中略)自然とそうなっています」(D)

(3) 《母親としての優越感》

授乳や泣きの際、自分にしかできないことや自分が行うことで泣き止んだことから母親なんだという思いを抱いた事から生成した。

「おっぱいをあげている時、自分にしかできない感じがするから」(A)

「抱っこしてすぐに泣きやんでくれたりして、自分が母親なんだと思う」(F)

IV. 考察

1. 産後1か月の初産婦褥婦が育児生活の中から抱いた思い

1) 【里帰り分娩も一長一短】

初産婦褥婦は実父母に対し【里帰り分娩も一長一短】という思いを抱いていた。これは里帰り分娩したことで実父母から家事支援、育児支援を受けたことや祖母も育児支援を手伝ってくれた事、一方で実母が育児に口を出してきたり、勝手に新生児のものを購入したりしたためと推察できる。実父母からの家事支援、育児支援を目的に里帰り分娩を決定し、適切な支援を実父母から受けたことで、家事や育児の負担は軽減され産後の身体の回復と育児に専念できる時間が確保されたことや、祖母も育児支援を手伝ってくれたことでみんなが育児に協力して家族みんなで児を育てているという思いを抱いた。一方で育児に口を出してくるということで実母から干渉されているという思いを抱いたためと考える。

鶴山⁴⁾らの報告から『育児は画一的ではなく、どのような育児方法を選択したかは一人一人によって異なるため、自分の説明や希望を聞きながら自分の方針に従った育児を行ってくれることを周囲の人物にも望んでいる』とあり、本研究の実母が育児に口を出してきたり、勝手に児のものを購入

したりした事で自分の方針と違う育児を押しつけられると捉えたと考える。これらのことから適切な家事支援、育児支援の提供や家族みんなで育てているという思い、逆に育児に口を出してくるということで実母から干渉されているという思いを抱いたことから【里帰り分娩も一長一短】という思いを抱いたと考える。

2) 【夫の育児参加は大丈夫】

初産婦褥婦は夫に対して【夫の育児参加は大丈夫】という思いを抱いていた。本研究は里帰り分娩の初産婦褥婦が対象であるため、夫は休日や週末を利用して褥婦の実家を訪問するケースが多かった。

来訪した際に育児を手伝ってくれたことから育児に協力してくれているという思いを抱いたと考える。また、育児に参加していることで頑張っている様子が窺われ自宅に戻ってからの育児協力は大丈夫という思いを抱いたためと考える。そのため【夫の育児協力は大丈夫】という思いを抱いたと考える。

3) 【友人はかけがえのない存在】

初産婦褥婦は友人に対して【友人はかけがえのない存在】という思いを抱いていた。それは、本研究の対象者の友人は対象者と同時期あるいは近い時期に子どもを設けている友人であったことから、育児で同様な体験をしている人たちであった。そのため育児の最新事情を知っていることから適確なアドバイスを得ることができた事や、友人と会話し思いを共有することで自分と同じことを考え、体験している人がいて1人ではないということを確認し、安心と連帯感を感じ心強い存在であるという思いを抱いたと考える。また、「長く帰れる機会がもうないから、友人にもゆっくり会っておしゃべりする機会ができた事がよかった」と語っていた対象者もいた。このことから、それぞれが結婚し実家を離れると会う機会が少なくなることや育児期間中は外出もままならないことがあるため、里帰り分娩が旧友と会うきっかけとなり、再会に喜びを感じ育児の話をするなど貴重な時間を過ごしたことが推測できる。これらのことから友人は初産婦褥婦にとって大切な存在であった事から【友人はかけがえのない存在】という思いを抱いたと考える。

4) 【分娩施設の存在は大きい】

初産婦褥婦は分娩施設に対し【分娩施設の存在は大きい】という思いを抱いていた。本研究の退院後の継続支援として電話相談と母乳外来が行われている。「ここしかないんですよ。頼る所は…」と語った対象者がいたことは、里帰り分娩を行った初産婦褥婦にとって普段生活していない地域で、初めての育児のためどこに相談していいのかわからず、分娩施設しか頼る所はないという思いを抱いたと考える。そのような中、妊娠・分娩・産褥の関わりを通し顔見知りの専門職がいることで、分娩施設を身近に感じ気軽に相談できる場所であった事や分娩施設の専門職が介入したことで適切な指導が行われたため初産婦褥婦は安心を得たと考える。また、母乳外来や電話相談の際に「いつでもいいよ」「もし心配なようなら母乳外来をやっているから来て」などというさりげないちょっとした一言は、里帰り分娩を行った初産婦褥婦にとっては気軽さのきっかけになったと考える。退院後は家族以外の人から「大丈夫だよ」という一言が無いため心配したり、どうしていいのかわからなかったと思う。「他者からのサポートを通して、自分の考えていることや感じている思いを認め、行っている育児を認めてもらうことで『自分への理解』を得ながら自己の育児方法を完成させてい

く」と鶴山⁴⁾らは報告している。専門的な視点から支援が得られる専門職に、「大丈夫だよ」と一言声をかけてもらうことで自分の行っている育児に対する確証を得、自信に繋がり前向きに考えられるようになったのではないかと推測する。これらのことから分娩施設の存在は心強い存在であったことから【分娩施設の存在は大きい】という思いを抱いたと考える。

5) 【母親なんだ】と思う】

初産婦褥婦は育児生活の中から【「母親なんだ】と思う】という思いを抱いた。産後1カ月の時期は1番不安の強い時期であり、自分の育児を完成させていく大切な時期でもある。その時期に実父母をはじめ夫、友人、分娩施設の専門職の方々から支援を受け心配事も解消し、育児を行っていく中で自分にしかできない事や児との相互作用の経験を通し、試行錯誤しながらも自分にあったやり方の確立を見出していた事から「母親なんだ」という思いを抱いたと考える。母子相互作用の経験を通し、試行錯誤しながら自分とわが子にあったやり方の確立を見出すプロセスは、産後1カ月の母親を対象とした前原⁶⁾の研究でも明らかにされていた。また、「褥婦の努力や試行錯誤により効果を実感することが、できると思える体験に繋がり、これからもやっていけそうと思え、母親としての自己同一感を感じていることが明らかとなった。」と小林⁷⁾の報告がある。この事から、自分の努力や試行錯誤しながら自分とわが子にあった対処方法を見つけたことで自信に繋がり、自分は「母親なんだ」という思いを抱き母親としての自己同一感を抱いたと考える。これらのことから初産婦褥婦は【「母親なんだ】と思う】という思いを抱いたと考える。

もし里帰り分娩をしない場合、新生児を抱えて育児から家事全般をすべて自分が行わなければならないことになる。そうすると初産婦褥婦へのストレスは計り知れないぐらい大きいものと推察できる。このような里帰り分娩を行うことで実父母との生活の中で情緒的サポート、道具的サポートを受けていたことで情緒的にも安定した生活を送っていたことが考えられる。そのため里帰り分娩が育児支援の1つとなっていると考える。

2. 看護への示唆

分娩施設を退院後、里帰り分娩の初産婦褥婦は実父母、夫、友人、分娩施設の専門職の方々のサポートを受けながら生活をしていたことが示された。「頼る所は、ここしかないんですよ。」と語った対象者もいたことから分娩施設の存在は大きいことが分かる。里帰り分娩の場合、出産施設の変更・市町村を越えた生活の場の変更により、行政からの新生児家庭訪問指導を受けることができない。産後1か月は一番不安の強い時期でもあり、自分の育児を完成させる時期でもあるにも拘らず、その大切な時期に専門職の支援を得られないこととなる。それを回避するためにも分娩施設の専門職の支援は必要な支援といえる。本研究の対象者も母乳外来を利用して不安を解決していた事から必要な支援と考える。また、外出もなかなかできない事も考慮すると、分娩施設からの家庭訪問も必要な支援と考える。

3. 研究の限界

本研究は6名という少数例であり、里帰り先の物理的距離や家族構成・実父母の勤務状況・人間関係など多くが関係していると思われるため、すべての初産婦褥婦に共通していると言えない。今後、更に症例数を増やすなどして検討していく必要があると考える。

V. 結語

産後1カ月間の育児生活の中での思いとして【里帰り分娩も一長一短】【夫の育児参加は大丈夫】【友人はかけがえのない存在】【分娩施設の存在は大きい】【「母親なんだ」と思う】の思いを抱いていた。

謝辞

本研究にご協力していただきました対象者の皆様、ならびに対象となる褥婦の方々を紹介して下さったクリニックの皆様に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 森田せつ子. 里帰り出産における夫婦の里方との関係. 愛知母性衛生学会誌, 2002, vol.20, p.15-23
- 2) 島田三恵子, 渡部尚子, 神谷整子, 中根直子, 戸田律子, 縣俊彦他. 産後1カ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査—初経産別, 職業の有無による検討—. 小児保健研究, 2001, vol.60, no.5, p.671-679
- 3) 島田三恵子, 杉本充弘, 縣俊彦, 新田紀枝, 関和男, 大橋和友他. 産後1か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査—「健やか親子21」5年後の初経産別, 職業の有無による比較検討—. 小児保健研究, 2006, vol.65, no.6, p.752-762
- 4) 鶴山愛子, 久米美代子. 産後1ヶ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 2005, 4巻, p.19-31
- 5) 松永佳子. 産後1か月の女性が受けたと認識しているサポートと希望するサポート. 東邦大学医学部看護学科紀要, 2008, 第22号, p.17-26
- 6) 前原邦江. 産褥期の母親役割獲得過程—母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス—. 日本母性看護学会誌, 2005, vol.5, no.1, p.31-37
- 7) 小林康江. 産後1カ月の母親が「できる」と思える子育ての体験. 母性衛生, 2006, vol.47, no.1, p.117-124

(2013年12月24日 受理)

キーワード：里帰り分娩・初産婦褥婦・生活